撮影場所◎真室川町ふるさと伝承館（真室川町）

奏であう人 vol.86

受け継ぎながら、変えていくこと

伝承野菜栽培や藁細工に取り組む髙橋伸一さんと、有機栽培のりんごを使ったジュースやシードルを製造する佐藤春樹さんに、受け継いだ営みを守りながら地域に根ざす仕事をどう未来へつないでいくのかをお聞きしました。

髙橋 伸一（たかはし しんいち）さん（真室川町）

1975年真室川町生まれ、同町在住。町役場で地域ブランドづくりに携わる中、伝承野菜や藁細工、伝統行事など地域に残る営みの価値に気づく。農家の5代目として家業を継ぎ、伝承野菜の栽培と手仕事を両立。工房ストローとして商品開発や、ワークショップにも取り組みながら、地域文化を仕事として成立させる実践を重ねている。

写真／志鎌康平

現代の暮らしに合わせ、大きさや形を整えた藁細工の作品。工房ストローは、春から秋は野菜を育て、冬には手仕事に向き合うという農家の営みを軸に活動している。百の仕事を担う「百姓」の考えを大切にしながら、地域の循環の中で伝統を次の世代へつなごうとしている。

佐藤 春樹（さとう はるき）さん（真室川町）

1981年真室川町生まれ、同町在住。2010年に就農し甚五右ヱ門芋の栽培を始める。2017年から祖父の果樹園を継ぎ、りんご栽培に取り組む。有機栽培を軸にジュースやシードルへと展開し、栽培と加工の両方で有機JAS認証を取得。現在はリンゴリらっぱ醸造所を立ち上げ、新たな展開を視野に地域の果実を生かしたものづくりを続けている。

自ら栽培した有機りんごを原料に、自社工場で製造するジュースやシードル（りんごのお酒）。栽培から加工まで一貫して手がけ、ラベルには有名絵本作家のイラストを採用するなど、商品の魅力を高めている。祖父の畑から始まった営みを発展させ、未来へつないでいる。

当たり前の日常にある、宝物に気づいて

「ありふれたものの中に、宝物が眠っているのかも知れません」。

そう語る髙橋さんは、十数年前に町役場で地域ブランドづくりに携わっていました。当時、真室川町に伝承野菜はないとされていましたが、探し続ける中で甚五右ヱ門芋（じんごえもんいも）のような長く守られた作物が見つかったと言います。

「伝承野菜や手仕事、伝統行事を訪ね歩いて気づいたのは、それらが特別に守られているのではなく、日々の暮らしに紛れているということ。身近だからこそ価値に気づきにくい。でも、作られなければ種は途絶えてしまうのです」。

継ぐ人がいなければ続かない現実を前に、髙橋さんは家業の農業を継ぐ決断をしました。二十年以上勤めた役場を離れ、農繁期は畑に、農閑期は藁細工に向き合う暮らしが始まりました。

一方、佐藤さんも祖父から受け継いだ新庄市のりんご畑を守ってきました。

「豪雪を乗り越え、祖父が苦労して開拓し守り続けてきた畑を、終わらせたくないと思いました。最初は生食用の販売も考えましたが、農薬に頼らず、環境にやさしいりんごジュースをつくりたいと考え、有機JAS認証を取得しました」。

現在、ジュースの生産は年間数万本規模へと成長し、工場を設立。日本で初めて栽培と加工の両方で有機JAS認証を取得しました。

「栽培と加工の両方で認証を受けているからこそ、ジュースに有機JASマークを付けることができます。それが信頼につながり、購入してくれる方が増えました」と佐藤さんは話します。

その言葉に髙橋さんは、「思いだけでは続かない。仕事として成り立たせなければ」と応じ、佐藤さんも「続けていくための仕組みを整えることは大事です」と応えます。

守るために、変えていく

髙橋さんが農閑期に行う手仕事の藁細工について語ります。

「藁細工は、昔ながらの姿を懐かしく感じる世代もいれば、逆に新鮮だと受け止める若い世代もいます。その受け止め方の違いに可能性を見いだし、デザイン性を加えたり、届け方を工夫したりしながら新たな形を提案しています。かつて生活用品として使われていた藁細工も、現代の暮らしに合わせて用途や大きさを変えながら生まれ変わっているのです」。

佐藤さんがうなずきながら応えます。

「見せ方はとても大切ですよね。自信をもってつくったりんごジュースですが、どうすればもっと手に取ってもらえるのかと考えた時、まずは商品そのものが魅力的に見えることが必要だと思いました。そこで、ラベルデザインや商品名を工夫し、より魅力が伝わるような商品づくりを心がけました」。

販売を通して、見せ方が価値を左右することを実感してきたというお二人は、商品の背景をきちんと伝えることで価値は変わると続けます。

この土地で仕事を続けるということ

「地域で続いてきた循環を、少しでも残したい。昔を語れる人がいなくなれば、この土地の個性そのものが失われてしまいかねません」。

そう話す髙橋さんの言葉に佐藤さんがゆっくりと言葉を重ねます。

「地域にしかないものを生かせば、仕事にもつながるし、その〝種〟は探せばまだあるはずです。見落とされているだけで、きっとどこかに眠っている。若い世代にも、その種探しに挑んでほしいですね」。

変えるというのは、壊すためじゃない。続けるために整えるということ。この土地だからこそ生まれる「物語」をどう未来へつなぐかという思いが、ひとつのテーマとして浮かび上がってくると話すお二人。

長く続いてきた営みを見つめ直し、新しい形へと整え、そしてそれを静かに積み重ねていく。お二人が語るその不断の歩みこそが、この土地の未来を支える力になっていくのではないでしょうか。

奏であう人vol.85「音がつむぐ地域の心」の記事冒頭で、「約380年前から続く上山市のまつりで耳にした、笛の音色」とすべきところ「約380年前から続く、鼓笛楽隊の調べ」と表現してしまいました。関係者ならびに読者の皆さまにお詫びいたします。